

アルテアの魔女 4

番外編
虹色の想い

後日談
移りゆく季節

たつみ暁

『アルテアの魔女』第4巻目次

番外編	虹色の想い	5
本編後日談	移りゆく季節	113
次巻予告		231
あとがき		232

『アルテアの魔女』番外編

虹色の想い

Salmon

『彼女がごはんを作ったら』

それは、とある日の夕刻。

遊撃隊の隠れ家のひとつに辿り着いて、リリムの淹れた茶で皆が一息ついた時、エレがきらつきらに顔を輝かせながら、意気揚々と宣言したのである。

「今日は私がお夕飯を作ります！」

その一言で、場の温度が見事ケリューンの山奥並に凍った。

インシオンがカップを取り落として中身がこぼれ、ソキウスの表情が固まる。シャンメルがそれまで手をつけずにいた茶を今更口にして、リリムは驚きを隠さずに目をみはった。

「……いや、いやいやいやいや」

しばらく誰もが二の句を継げずにいたのだが、沈黙ばかりが漂う空気をまず打ち破ったのは、シャンメルだった。何度も首を横に振りながら、ひきつった笑いを浮かべる。

「エレは作んなくていいよー？」

「……何か、すごいのができそう……」

リリムも何を想像しているのか、青ざめながらぼそりと本音をこぼす。それはそうだ。ここの箱入り娘な皇女様に料理の腕を期待する方がおかしいだろう。

「えーと、エレ。人には向き不向きと言うものがありましてね。無理はしなくて良いのですよ？」ソキウスまで不自然な笑みを顔に張りつけて遠回しに諭すと、「ええー」と不満たつぷりの声をエレがあげた。

「皆さん、ひどいです！ 私だつてセアクにいた頃は、きちんと厨房に入っていたんですよ」それは嘘ではない。王姉とて、いつかは誰かに嫁ぐ身。一般家庭に降嫁する可能性もある。

その時に、料理のいろはもわからないお姫様育ちですので、という言い分で逃げおおせる事はできない。料理長に教えを乞い、たすき掛けで袖をまくり、包丁を握り火を使って、通り一遍の段取りは習ったのだ。

『エン・レイ様のお料理は奇跡ですね！』って言われた事もあるんですからー！』

「……お前、それ、どっちの意味だ？」

満面の笑みを浮かべ得意気に拳で胸を叩くエレの顔を見ながら、インシオンが眉間に皺を寄せて溜息をつく。しかし彼の危惧はエレには届かなかつたらしい。

「とにかく、任せてください！」

もう誰が止めても聞かなさうなほど勢い込んで、エレは荷物の中から、今日町で調達して来

た食材をあさり始めた。

彼女以外の四人は暗い顔を見合わせて、

(もう、腹を壊して三日起き上がれなくても仕方無い)

という覚悟を決め合つたのである。

が。

エレの主張はあながち誇張でもなかった。

長い髪が食材に触れないように頭のとっぺんでまとめて、白いエプロンを身に着けると、台所に立つ。

慣れた手つきで野菜の皮をむき、葉物は見事な千切りに。肉はきちんと食べやすい大きさに切り分け、魚の鱗を包丁で丁寧に削ぐ。料理下手の通説セネリとしてありがちな、砂糖と塩を間違えるなどという愚は犯さず、火にかけて鍋に調味料を入れる順番も完璧。

手際の良さに皆が見入る事、一時間半ほど。美味しそうなおいが漂い見た目もそこそこの料理がテーブルの上に並び、最後に、焼き直したほかほかの白パンと、うさぎを模した切り方をした林檎までもが出て来た。

「ふえ〜」思わずシャンメルが皆の気持ちを代弁する。「まともだ」

「だから言ったじゃないですか」

エプロンを脱ぎながら、心外だ、とばかりにエレが唇を尖らせた。

だが、見た目は良くても味が云々という事は往々にしてある。誰もがその可能性を頭に置きながら、「いただきます」を言って、料理を口に運んだ。

しばらく無言の時間が流れた後。

「……うまい」

最初に感想を洩らしたのはやはりシャンメルだった。

「うまいよ、エレー！」

そう歓声をあげてがつつく。味付けはセアク式の塩味や醤油味が多いが、芋や人参は芯まで火が通っていて柔らかい。肉や魚は、生焼けでも焼きすぎでもない。

「これは……なかなか」

「うん、悪くない」

ソキウスとリリムも、驚きつつも賞賛を贈ってくれる。「奇跡」は良い方向での奇跡だったのだ。

「ありがとうございます」

満足気に微笑んだエレは、最後の一人が黙々と料理を口に運んでいる事に気づいて、おずおずと声をかける。

「あ、あの、インシオン。おいしいですか？」

「……ああ」

魚を咀嚼して呑み込んだインシオンは、エレの方こそ向かなかったが、ぽつりと呟いた。

「いい嫁になるな、お前」

途端にエレの顔は真つ赤に上気した。心臓がばくばく言う。

褒められた。なのに胸にくすぶるこの焦げた気持ちは何だ。「いい嫁になる」とは、「お前さつさとインシヤナ王に嫁いで俺達を楽にさせる」と遠回しに嫌味を言っているのだろうか。

こみ上げた衝動に任せて、ぺしんとインシオンの肩をはたく。インシオンは何故いきなり攻撃を受けたのか理解できない様子で、赤い瞳を真ん丸くしてエレを見上げた。その「全くわかってません」という態度が余計に腹立たしい。

「何だお前。何なんだよ!？」

訳がわからずに狼狽するインシオンの頭を。ぺしぺし叩き続けるエレ、という構図を前にし、

「あーあ」

もしやもしやと肉を頬張りながらシャンメルがぼやく。

「朴念仁だねー」

「なっていないわね」

「女心がわかっていませんね」

リリムとソキウスも深くうなずいて同意する。

何故エレが怒ったか。傍から見ればその感情の原因はただ漏れなのに、知らぬは当地人同士ばかり。その事を、やはり本人達は気づいていないのであった。

『e Call My Name』

ある街に立ち寄った昼下がりの事。

インシオンが「用事がある」と二人別れ、エレとリリムとシャンメルの三人になった。ただ時間を浪費して待つのも勿体無いという事で、こじやれた喫茶店に入って午後のお茶とおやつを楽しんでいると。

「私」

甘いクリームと季節の果物がのったケーキをフォークでつつきながら、エレが思い出したようにぼつりと洩らした。

「自分の本名を覚えていないんですよね」

何の気無しに言ったつもりだったが、空気がずんと重くなった気がした。エレが顔を上げると、リリムとシャンメルは、心中複雑そうな表情をしてエレを見つめている。

そこで初めて気づく。二人も同じ思いを共有している仲間なのだと。

十四年前、『タドミールアイドゥールの悲劇』で破神の血を浴びた子供達は、インシオンが建てた孤児院に保護された。しかしその孤児院は、無自覚だったとはいえエレが燃やしてしまったのである。そこにいた子供達は多くが亡くなり、生き残った者も、リリムやシャンメルのように、並

大抵ではない人生を送る事を余儀無くされた。

エレはある人物によって過去の記憶を改竄され、当時の思い出はほとんど無い。しかしこの場合、記憶があるのと無いのでは、どちらの方がより気が楽なのだろうか。深く考えるまでも無く答えが出て、「すみません」とエレは身を縮こませた。

「軽率な発言でした」

しかし。

「えー」

いつもの軽い調子で、シャンメルが返して来る。その口元はいつも通りに笑っていた。

「別にまだ何も言っていないじゃん。エレが謝る事じゃないって」

「気になるのは、わかる」

リリムも短く言いながら、チーズケーキを口に運ぶ。

「そんな事言ったらオレ達だって同じだよ。オレだって自分の名前知らないし」

さくらんぼのタルトを、フオークで切り崩すのが面倒臭くなったか、手でつかんでかぶりついた後、シャンメルが口をもごもごさせながら言う。

「インシオンに訊いてみたら？ あの人、孤児院の全員の顔と名前覚えてるはずだよ」

そうだったのか。驚きに目をみはると、シャンメルがにっこりと笑う。

「ほら、丁度戻つて来た」

彼が指差す方向を見やると、窓際の席に座っていたエレの視界に、通りの向こうから歩いて来る黒装束が映った。

「——ありがとうございます！」

エレはがたと音を立てて席を立ち、飛び出すように店を走り出てゆく。その背を見送りながらシャンメルがにこにこしている。

「シャンメルって意外と気が利くよね」

ぼそりとリリムが洩らしたので、「そーかなー」とへらりと笑う。

「リリムだつて、本当は自分の名前知ってるのに、言わなかったじゃん。氣遣つてるよね」
ずばり言い当てられて、リリムの頬が赤く染まる。

「べつ、別に。エレが困った顔してたら、インシオンが機嫌悪くなるし。面倒なだけだから」
口ではそう言いながらも、照れくささをごまかす為だろうか。ぐさぐさとフォークがチーズケーキを突き崩してゆく。

「オレ達、割と苦勞人だよねー」

シャンメルはけらけら声をあげてタルトをひと呑みすると、エレが残して行ったケーキにもちやつかりと手を伸ばした。

「インシオン！」

道の向こうから歩いて来る青年の名を大声で呼び手を振ると、呼ばれた当人はぎよつとした表情で顔を上げ、周囲を見回しながら焦りきった様子で駆け寄って来た。

「お前、ドあほか!？」

「え、イン……むごつ!？」

また名を呼ぼうとしたが、大きな手で咄嗟に口を塞がれる。彼の視線を追って見回せば、道行く人々の注目をばっちり浴びていた。

「こんなところで、でかい声で人の名前呼ぶんじゃねえよ！」

呆れ切った声で叱咤される。それでようやく合点がいった。インシオンはイシヤナでもセアクでも名を知られた有名人だ。しかもその名を持つ人間は彼一人しかいない。そんな人間の名前を往来で叫んだら、『黒の死神』がここにいます」と大声で主張しているようなものだ。良からぬ考えを持つている者に聞かれたら、面倒な事態にもなりかねない。

エレはもごもご言いながら腕を上下させ、インシオンがやっと手を離してくれろと、ふはつと息継ぎをし、

「す、すみませんでした……」

と頭を下げた。先程といい、自分は本当に思慮が足りないと落ち込む瞬間である。

「もういい」

インシオンは溜息をつき、さりげなく歩き出してその場を離れる。小走りの後を追うと、「で」と赤い瞳がちらりとこちらを向いた。

「息せき切って走って来て。何を言いたかったんだよ」

言われてようやく、エレは自分の目的を思い出す。

「あ、あの、あのですね」

まだ何も言っていないのに、心臓がどきどきと逸る。エレが本題を告げると。

「……名前？」

インシオンが足を止め、怪訝そうに眉をひそめた。

「んなもの訊いて、今更何だっつんだ」

途端に不機嫌になった目が、じろりと見下ろしてくる。

「何だお前、今の名前気に入ってないのか」

「ち、ちち違います！ そんなんじゃないです!!」

咄嗟に両手と首を横にぶんぶん振る。インシオンにもらった『エレ』の名はとても気に入っている。何より、彼がエレにくれた大事な愛称だ。嫌だなどと言ったならばちが当たる。

それでも、それとは別の思いが胸の奥で渦を巻くのだ。

インシオンに、他の誰でもない彼に、本当の名を呼んで欲しい。その低い声で名を囁いてくれたら、それだけでどんなに幸せな気分になれるだろう。

だが、土台無理な話だったのだろうか。インシオンがそんな頼みを聞いてくれると、少しでも期待したのが浅はかだったのだろうか。しゅんとうつむき溜息をつく。

「耳」

インシオンがぶつきらぼうに告げたので、顔を上げる。

「耳貸せ」

彼は仏頂面のままだったが、近づくように指で示している。何だろうと思いつながら少し近寄ると、肩に手が乗り、整った顔が迫って、耳朶をかみそうな距離で彼が耳打ちした。

「お前、今日誕生日だろ。夜は一等の店を予約して来てやったから、存分に食えよ」
そう言った後に、小さく付け足す。

「」

ほとんど吐息のような声が耳をくすぐり、彼が身を離す。今のは何だったのだろうか。ぐるぐ

る考えて、順々に理解してゆく。

インシオンが至近距離で囁いてくれた。

インシオンが自分の誕生日を覚えていてくれた。

インシオンが自分の為にお店を予約してくれた。

そして、インシオンが。

(……呼んでくれた……?)

エレの本名を。

理解から相当な間を置いて、喜びが怒涛となって胸に押し寄せた。嬉しさのあまり頭のとっぺんまで一気に血がのぼって、顔が真っ赤になる。

「——おい!？」

振り返ったインシオンが慌てて手を伸ばし身体を支えてくれた事で、エレは初めて、自分がその場で卒倒しそうになっていた事を悟った。

「おい、お前まじで大丈夫か!？ 生きてるか!？」

「ら、らいりようふ、れす」

大丈夫です、と返そうとしたつもりが、全く呂律が回っていない。全身が心臓になったかのごとくどくどくと脈打って、酔ったように火照っている。エレが酒に酔った事は無いが、恐ら

く酔いとはこんなものだろう。いや、実際酔っているのかもしれない。インシオンのささめきに。

身体に力は入らないが、嬉しさが指先まで沁み渡っている。

「つたく、お前、ほんつとしようがねえ奴だな」

インシオンが呆れきった様子でぼやくと、エレをおぶって道を歩いてゆく。

頼もしい背中にもたれかかって揺られながら、エレは改めて感じるのだ。

この人が好きだ。この人がもたらしてくれるもの全てが嬉しくて、愛おしい。

子供としか見られていなくても、想いが届かなくても、彼の傍にいられる時間が、大切に大切に仕方無い。

(どうか)

エレは創造の女神ゼムレアに心の中で祈りを捧げる。

(この時間がいつまでも続きますように)

たとえこれが、刹那の幸せだとわかりきっていても、そう願わずにはいられなかった。

当サンプルは、4巻の序盤です。
この先は、本編でお楽しみください。
なお、Web版には無かった、
書き下ろし3本も収録しております。

七月の樹頼 たつみ 暁
URL:<http://july.main.jp/>
Twitter:tatsumisn